

妊娠先行型結婚であることによって

親子関係に差異は生じるのか

第一子の生まれたタイミングの違いに着目して

高橋 香苗

(明治大学大学院情報コミュニケーション研究科)

【要旨】

妊娠先行型結婚は家族形成のあり方の一つとして定着しつつある。しかし一方では養育環境が整っていない状況での妊娠、出産であるとみなされ、支援の必要な存在であると位置付けられてきた。妊娠先行型結婚に関する研究では、結婚後に妊娠する夫婦との違いが検討され、妊娠・結婚した年齢の違いが論点として挙げられてきた。つまり若年の場合は結婚後に妊娠する夫婦との間に差があるため、若年の母親に対する支援のあり方が議論されてきた。しかしながら既存研究には、分析対象に父親が含まれることが少なかったこと、妊娠期や産後すぐの時期に対象が絞られていたこと、妊娠先行型であることと若年であることが必ずしも区別されていなかったことという課題が残されている。こうした既存研究の課題をふまえ、本稿はNFRJ18の個票データを妊娠後に結婚した群と結婚後に妊娠した群に分け、さらに第一子の出産のタイミングによって類型化し、結婚をめぐる経験とそのタイミングの違いによって親子関係にどのような差があるのかを検討した。その結果、子どもとのポジティブな関わりあいは類型に関わらずほぼ全ての親がしている一方で、ネガティブな関わりあいは、父親は3割程度、母親は5～6割程度がしていることがわかった。また子どもの年齢ごとに第一子との関係性の良好度の違いを検討してみると、妊娠先行型であることによる違いが観察されるのは母親ではなく父親であることが明らかになった。

キーワード： 妊娠先行型結婚、出産年齢、親子関係

1. 問題意識

妊娠先行型の結婚、いわゆるできちゃった結婚の数は増加している。厚生労働省の統計によれば、第一子の嫡出子に対して結婚期間が妊娠期間よりも短く生まれた嫡出第一子の比率は昭和55年の12.6%から平成21年には25.3%にまで上昇している。第1子出生までの結婚期間別にみた出生構成割合をみても、かつては結婚後10ヶ月で生まれる率が最も多かったことに対して、近年では結婚後6ヶ月、すなわち妊娠3ヶ月前後で入籍した夫婦のもとに生まれる場合が多くなっている（平成17年度、平成22年度「出生に関する統計」厚生労働省）。

妊娠先行型の結婚は今や家族形成の一つのパターンとして一般化しているが、一方で、不安定な家族になりやすい典型的なスタイルとして位置づけられてもいる。妊娠先行型結婚

には不幸というレッテルがあり(永田 2016)、とりわけ保健所や病院といった臨床的な立場では、妊娠先行で結婚することが育児不安を増大させ、母性の発達においても課題を残すとして問題視されてきた(近藤ほか 2005; 平田・西脇 2014)。

2009年に施行された改正児童福祉法は、継続的な支援の必要がある妊婦を「特定妊婦」と位置づけ、妊娠期から子育て期にわたって切れ目のない支援をすることを謳っている。保健師の特定妊婦に対する支援は妊産婦の「子どもへの愛着を基に生活する能力の見極め」、必要なサポートを提供することである(黒川・入江 2017:116)。サポートが必要な存在としての特定妊婦を医師や看護師、ソーシャルワーカーらが選定する過程を検証してみると、中絶を繰り返していたり若年であると特定妊婦に選定されやすく、また心身の不調、未婚といった婚姻状況も注意の必要があると捉えられている(伊藤ほか 2020)。特定妊婦に関してはさまざまな要件が挙げられているものの、その中に妊娠先行型結婚とも関連する未入籍での妊娠も含まれている。

妊娠先行型の結婚が問題となる背景には、生殖と子育ての結びつきの強さがあると考えられる。妊娠先行型の結婚が問題視される理由について永田は、愛情を伴わない性行動の結果であるとみなされていることのほかに、家族の再生産という前提のもと生活水準を維持する資産がないこと、安定的な子育てがなされないこと、家族の安定性が欠如しているとみなされることがあると論じている(永田 2016)。こうした議論から、子どもを生んだらきちんと育てなければならないという社会規範のなかでは、妊娠先行型で結婚することは、子どもを生育する環境が十分に整わないままに子どもをもった状態であるとみなされていることが示唆される。

妊娠先行型結婚は家族形成の一つのパターンとして定着しつつある。しかしながら、結婚し養育環境を整えてから子どもをもつというあり方に対して、妊娠先行型結婚は子どもの養育環境が整っていないとみなされ、サポートが必要な存在として位置づけられてきた。妊娠先行型の結婚をして親になった人々には、結婚後出産をするという人々と比べて、どのような違いがあるのだろうか。

2. 先行研究の整理と研究の目的

妊娠先行型結婚に関する既存研究では、年齢が重要な論点として挙げられてきた。妊娠先行型結婚の夫婦の交際期間の短さ、低学歴、非専門職、低収入といった特徴は、妊娠先行型結婚は若年者に多いことが反映された結果であると指摘されている(永田 2016)。一方で、20代後半以降で妊娠先行型結婚した人々に焦点を当ててみると、20代後半以降の女性たちにとって、妊娠は結婚モラトリアムを終了するきっかけであり、妊娠発覚後に産むか否かの選択を不問にして、安定した夫婦のもとで子どもを育てていくという近代家族のあり方に収束していくことが指摘されている(永田 2002)。妊娠末期の夫婦を対象に妊娠先行の群と結婚後妊娠した群とを比較してみると、母親の子どもへの愛着的な感情には妊娠先行群と

結婚後妊娠群の差はなく、父親の対児感情にも違いはみられないが、25歳未満の妊娠先行群の母親は子どもへの関心や愛着、夫への愛情が結婚後妊娠群に比べて低いという差が生じている(盛山・島田 2008)。このように妊娠先行型結婚のなかでも若年であるということによって、属性や親子関係、夫婦関係、いわば養育環境に何らかの課題が生じることが指摘され、とりわけ若年出産をした母親に対する支援のあり方が議論されてきた(大川 2010; 村越ほか 2011; 林ほか 2015; 大川ほか 2018)。

このように妊娠先行型結婚の年齢による違いが明らかにされてきた一方で、既存研究にはいくつかの課題が残されている。まず分析対象の中心が母親であるために、父親にとって妊娠先行型結婚であるということがどのような違いとして顕在化するのかを明らかにできていない。また、妊娠期あるいは出産直後の親を対象とした検証によって対児感情の違いが明らかにされてきたが、それがその後どのような親子関係に発展していくのかということの検討は不足している。さらには、とりわけ若年出産に関する議論では、妊娠先行型結婚であることと若年であることが必ずしも区別されているわけではなかった。こうした既存研究の課題をふまえ、本論文は、NFRJ18の個票データを妊娠後に結婚した群、結婚後に妊娠した群に分け、さらにそれを第一子の出産のタイミングが早い群、中間群、遅い群に分けて類型化し、親子関係にどのような違いがみられるか検討する。

3. 研究方法

本論文は、日本家族社会学会が2019年1月に実施した「第4回家族についての全国調査」(NFRJ18)の個票データを使用して、妊娠先行と結婚先行の別と第一子の出産年齢によって分析類型を作成し、①子どもとの関わりかたについて類型による違いがあるか、②第一子との関係性に類型による違いがあるかをそれぞれ検討した。なお、子どもとの関わりかたの比較検討では未子の年齢による統制をおこない、第一子との関係性の検討では第一子の年齢によって統制をおこなった。度数の比較にはクロス表分析と残差分析を用いた。

3.1 変数の操作

第一子の出産年齢と結婚をめぐる経験から【妊娠先行型・早期群】【妊娠先行型・中間群】【妊娠先行型・晚期群】【結婚先行型・早期群】【結婚先行型・中間群】【結婚先行型・晚期群】の六つの分析類型を作成し、これを独立変数とした(表1)。変数の作成にあたって、まず結婚をめぐる経験から、妊娠先行型と結婚先行型のいずれのパターンを経験しているかを分別した。問52「あなたのこれまでの人生で、次のような経験をしたことはありますか」で3「妊娠をきっかけに結婚を決めた」を選択したものを【妊娠先行型】、選択しなかったものを【結婚先行型】とした。次に第一子を出産したタイミングが早いか遅いかを分けた。問25「ご健在のお子さん一人ひとりについて、年上のお子さんから順にお答えください。」の1番上の子の(3)「実子かどうか」で1「実子」を選択した回答者を選択した上で、

問2「年齢」から問25の1番上の子の(2)「年齢」の数字を減じた数を【第一子出生時の本人年齢】とした。第一子が実子である回答者全体の第一子出産年齢は、最小値が15、最大値は49で、その平均は28.6(若年票回答者の第一子出産年齢は、最小値が15、最大値は44で、その平均は29.2)であった。本研究は第一子の出産のタイミングによって親子関係に違いがあるのかを検証するため、【第一子出生時の本人年齢】を、26歳までに第一子が生まれた【早期群】、31歳以降に第一子が生まれた【晚期群】にし、その間にあたる27歳から30歳の間で第一子が生まれた群を【中間群】として三つのグループに分けた。

表1 分析類型の構成比

	早期群 ～26歳	中間群 27～30歳	晚期群 31歳～	合計
妊娠先行型	8.8%	3.1%	1.8%	296
結婚先行型	27.8%	31.4%	27.1%	1862

注1：本表は分析類型の全体的な構成比を示すため、全体に対する割合を表記している

統制変数は、性別、第一子の年齢、末子の年齢を用い、それぞれ問1と問25(2)を使用した。第一子の年齢は10歳刻みで分割し、全ての類型に観測度数がある【0～9歳】【10～19歳】【20～29歳】までを用いた。末子の年齢も同様に10歳刻みで分割したが、本論文では子どもとの関わりかたに関する変数を分析する際の統制として【0～9歳】のみを使用した。

従属変数は、子どもとの関わりあいと第一子との関係性である。子どもとの関わりあいは問28(ア)「子どもによく話しかけること」(イ)「子どもを無視すること」(ウ)「手や体をたたいて叱ること」(エ)「怒って、子どもを押し入れや浴室に閉じこめたり、家の外(ベランダなど)に出すこと」(オ)「子どもが傷つくようなことを言うこと」(カ)「子どもの気持ちや考えを理解しようとする」とを用い、1「よくある」2「しばしばある」3「たまにある」を【ある】に、4「まったくない」を【ない】にリコードした。なお、この変数は若年票でのみ聞かれている設問であるため、壮年票、高年票の回答は分析に含まれていない。第一子との関係良好度は問27(ス)「この方との関係は、いかがですか。」を用い、1「良好」2「どちらかといえば良好」を【良好】に、3「どちらかといえば悪い」4「悪い」を【良好ではない】にリコードした。ただし第一子との関係良好度に関する設問は若年票と高年票は全ての子どもに対して聞いているが、壮年票では18歳以上の子どもに対してのみ聞いている。そのため、壮年票の回答のうち第一子の年齢が0～18歳である場合はこの分析に含まれていない。

学歴、世帯年収、子ども数、離死別経験の有無を属性変数とし、分析類型全体の特徴を先に確認しておきたい。学歴は問3を用い、1「中学校」2「高校」を【中・高卒】に、3「専門学校(高卒後)」4「短大・高専」を【短大・専門卒】に、5「大学(4年制)」6「大学院・大学(6年制)」を【大学・院卒】にリコードした。世帯年収は問54の家計全体を用い、1「収

入はなかった」2「100万円未満」3「100~129万円台」4「130~199万円台」5「200~299万円台」6「300~399万円台」7「400~599万円台」を【600万円未満】に、8「600~799万円台」9「800~999万円台」10「1000~1199万円台」11「1200~1399万円台」12「1400万円以上」を【600万円以上】にリコードした。子ども数は問24を用い、自由記述で回答された内容のうち、3以上の数字を回答しているものは【三人以上】にした。離死別経験の有無は問16を用い1「離別も死別も経験していない」を【なし】に、2を回答したものを【あり】にリコードした。

分析類型と属性変数との関連を示した表2から、まず学歴はいずれも【早期群】には【中・高卒】が、それぞれの【中間群】と【妊娠先行型】の【晚期群】には【短大・専門卒】が、【結婚先行型】の【中間群】【晚期群】には【大学・院卒】が有意に多いことがわかる。こうした早期で結婚・出産した人々の学歴の特徴は既存研究の指摘とも一致する(永田 2016)。

世帯年収としては、【妊娠先行型】の【晚期群】と【結婚先行型】の【早期群】は【600万円未満】の世帯が有意に多く、【結婚先行型】の【中間群】【晚期群】には【600万円以上】の世帯が有意に多いことがわかった。同じ【晚期群】でも【結婚先行型】は世帯収入が比較的多いことに対して、【妊娠先行型】は世帯収入が少ないことは、妊娠先行型結婚のカップルが経済的な不安定さから結婚モラトリアムに陥っていたという既存研究の指摘と関連していると考えられ(永田 2002)、つまり【晚期群】には経済的な不安定さから結婚を延期していた状況の中で妊娠をきっかけに結婚したカップルが多いのではないかと推察される。

子ども数は、いずれも【晚期群】は【1人】、【早期群】は【3人以上】が多いという結果になった。

離死別経験については、【結婚先行型】の【早期群】が、また【妊娠先行型】は子どもの出産タイミングに関わらず離死別の経験【あり】が有意に多いことがわかった。つまり、【妊娠先行型】のカップルと若いうちに結婚したカップルは夫婦関係が不安定な傾向にあるといえる。こうした夫婦関係の不安定さは既存研究の指摘と一致しているが(永田 2016)、本論文の結果からすれば、夫婦関係の不安定さには【妊娠先行型】であるということと年齢が若いということの双方が関連していると考えられる。

表2 分析類型と属性変数との関連

	妊娠先行			結婚先行			合計	χ^2	p
	早期群	中間群	晩期群	早期群	中間群	晩期群			
学歴	(8.8%)	(3.1%)	(1.8%)	(27.7%)	(31.5%)	(27.0%)	(2,152)		
中・高卒	13.3%	3.0%	1.4%	39.8%	26.2%	16.3%	988		
短大・専門卒	6.5%	4.3%	3.3%	24.3%	34.9%	26.6%	601		
大・院卒	3.4%	2.0%	0.9%	10.3%	37.1%	46.4%	563	313.768	**
世帯収入	(8.7%)	(3.1%)	(2.0%)	(27.5%)	(31.3%)	(27.5%)	(1,926)		
600万円未満	9.8%	3.1%	2.7%	34.1%	28.9%	21.5%	941		
600万円以上	7.7%	3.1%	1.3%	21.1%	33.5%	33.2%	985	63.671	**
子ども数	(8.8%)	(3.1%)	(1.8%)	(27.8%)	(31.4%)	(27.1%)	(2,158)		
1人	5.2%	3.1%	3.8%	10.3%	25.6%	52.1%	426		
2人	6.7%	2.7%	1.2%	29.8%	33.6%	26.0%	1158		
3人以上	15.7%	4.0%	1.6%	36.6%	31.4%	10.8%	574	282.377	**
離死別経験	(8.9%)	(3.2%)	(1.8%)	(27.5%)	(31.5%)	(27.1%)	(2,082)		
あり	6.4%	2.8%	1.4%	26.4%	33.8%	29.3%	1741		
なし	21.7%	5.3%	3.8%	33.4%	19.6%	16.1%	341	131.097	**

注1：†はp<.10、*はp<.05、**はp<.01をそれぞれ示している。

注2：網掛けしたセルは残差分析の結果5%水準で有意であることを示している。

4. 分析

a) 子どもとの関わりかた

子どもとの関わりかたについて男女別に分析する。なお、ここで使用する変数は、過去1年間の子どもとの関わりかたを尋ねる設問であるため、分析は子育て期にあると考えられる未子年齢が9歳以下の調査票に限定した。表3には、男女別でそれぞれ分析類型と子どもとの関わり合いの有無を示した。

その結果、類型に関わらず、「よく話しかける」「気持ちや考えを理解する」というポジティブな関わり合いをほぼ全ての親がしていることがわかった。一方で、「無視する」「手や体を叩いて叱る」「傷つくようなことを言う」というネガティブな関わり合いは、父親は3割程度が、母親は5~6割程度がしているという結果になった。これに対して「閉じ込める、締め出す」ことが【ある】のは父親も母親も1割に満たず、ほとんどの親がそうした関わりかたはしていないことがわかった。

また、母親には類型による有意な差は確認されなかったが、父親には類型による差がみられた。「よく話しかける」という関わり合いは【妊娠先行型】の【晩期群】が10%水準で有意に【ない】が多く、また「無視する」という関わり合いは【結婚先行型】の【中間群】が同じく10%水準で有意に【ある】が多いことがわかった。

表3 分析類型と子どもとの関わりあいとの関連 (未子9歳以下)

	妊娠先行			結婚先行			合計	χ^2	p
	早期群	中間群	晩期群	早期群	中間群	晩期群			
(男性)									
よく話しかける	(9.4%)	(4.9%)	(3.9%)	(6.9%)	(21.7%)	(53.2%)	203		
ある	9.0%	5.0%	3.5%	7.0%	21.5%	54.0%	200		
ない	33.3%	0.0%	33.3%	0.0%	33.3%	0.0%	3	10.716 † ※	
無視する	(9.4%)	(5.0%)	(4.0%)	(6.9%)	(21.8%)	(53.0%)	(202)		
ある	10.7%	7.1%	0.0%	7.1%	32.1%	42.9%	56		
ない	8.9%	4.1%	5.5%	6.8%	17.8%	56.8%	146	9.281 † ※	
手や体を叩いて叱る	(8.9%)	(5.0%)	(4.0%)	(6.9%)	(21.8%)	(53.5%)	(202)		
ある	11.7%	5.2%	6.5%	9.1%	23.4%	44.2%	77		
ない	7.2%	4.8%	2.4%	5.6%	20.8%	59.2%	125	6.168 ※	
閉じ込める、締め出す	(9.4%)	(4.9%)	(3.9%)	(6.9%)	(21.7%)	(53.2%)	(203)		
ある	13.3%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	53.3%	15		
ない	9.0%	5.3%	4.3%	7.4%	20.7%	53.2%	188	3.842	
傷つくようなことを言う	(9.5%)	(5.0%)	(3.5%)	(6.5%)	(21.9%)	(53.7%)	(201)		
ある	13.3%	6.7%	3.3%	10.0%	28.3%	38.3%	60		
ない	7.8%	4.3%	3.5%	5.0%	19.1%	60.3%	141	8.906 ※	
気持ちや考えを理解する	(9.4%)	(5.0%)	(4.0%)	(6.9%)	(21.8%)	(53.0%)	202		
ある	9.1%	5.1%	3.6%	7.1%	21.3%	53.8%	197		
ない	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	40.0%	20.0%	5	6.385 ※	
(女性)									
よく話しかける	(13.2%)	(6.0%)	(2.6%)	(13.5%)	(27.8%)	(36.8%)	266		
ある	13.2%	6.0%	2.6%	13.5%	27.8%	36.8%	266		
ない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0	----- ※	
無視する	(12.5%)	(6.1%)	(2.7%)	(13.6%)	(28.0%)	(37.1%)	(264)		
ある	12.0%	2.6%	3.4%	14.5%	32.5%	35.0%	117		
ない	12.9%	8.8%	2.0%	12.9%	24.5%	38.8%	147	6.604	
手や体を叩いて叱る	(12.9%)	(6.1%)	(2.7%)	(13.7%)	(27.8%)	(36.9%)	(263)		
ある	15.4%	6.0%	3.4%	14.1%	30.2%	30.9%	149		
ない	9.6%	6.1%	1.8%	13.2%	24.6%	44.7%	114	6.444	
閉じ込める、締め出す	(12.8%)	(6.0%)	(2.6%)	(13.6%)	(27.9%)	(37.0%)	(265)		
ある	20.0%	6.7%	6.7%	20.0%	20.0%	26.7%	15		
ない	12.4%	6.0%	2.4%	13.2%	28.4%	37.6%	250	2.919	
傷つくようなことを言う	(12.9%)	(5.7%)	(2.7%)	(13.6%)	(28.0%)	(37.1%)	(264)		
ある	14.4%	5.4%	3.6%	13.8%	25.7%	37.1%	167		
ない	10.3%	6.2%	1.0%	13.4%	32.0%	37.1%	97	3.224	
気持ちや考えを理解する	(13.2%)	(6.0%)	(2.6%)	(13.5%)	(27.8%)	(36.8%)	266		
ある	13.2%	6.0%	2.6%	13.6%	27.9%	36.6%	265		
ない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	1	1.721 ※	

注1：†は $p < .10$ 、*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ をそれぞれ示している。

注2：※は期待度数が5未満のセルが20%以上、もしくは期待度数が1未満のセルがあったことを示している。

注3：網掛けしたセルは残差分析の結果5%水準で有意であることを示している。

b) 第一子との関係性

第一子との関係性について、第一子の年齢を分けながら性別ごとに分析する。表4は男女別にそれぞれ分析類型と第一子との関係良好度について示している。

全体的な特徴として関係良好度は【良好】であることが指摘できる。一方で性別による違いがあることも確認された。まず男性について、第一子の年齢が0～9歳の場合、【妊娠先行型】の【中間群】【晩期群】で【良好ではない】が10%水準ではあるものの有意に多いことがわかった。さらに10～19歳、20～29歳では【妊娠先行型】の【早期群】は【良好ではない】が多いという結果になった。一方で女性は、全体的に【良好】であり、類型による有意な差はみられなかった。妊娠末期の母親には妊娠先行であるかどうかによって違いがある一方で父親にはそのような違いはないという既存研究の指摘があったが(盛山・島田 2008)、子どもがある程度成長した段階での親子関係について検討した本論文の分析では反対に、母親ではなく父親に妊娠先行型であることによる差が見出される結果となった。

表4 分析類型と第一子との関係良好度

	妊娠先行			結婚先行			合計	χ^2	p
	早期群	中間群	晩期群	早期群	中間群	晩期群			
(父親)									
0～9歳	(4.3%)	(4.3%)	(3.7%)	(6.2%)	(21.6%)	(59.9%)	(162)		
良好	4.4%	3.8%	3.2%	6.3%	22.2%	60.1%	158		
良好ではない	0.0%	25.0%	25.0%	0.0%	0.0%	50.0%	4	10.464 † ※	
10～19歳	(15.8%)	(6.2%)	(2.7%)	(13.0%)	(29.5%)	(32.9%)	(146)		
良好	13.7%	6.5%	2.2%	13.7%	30.9%	33.1%	139		
良好ではない	57.1%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	28.6%	7	15.190 * ※	
20～29歳	(9.2%)	(2.8%)	(1.8%)	(13.4%)	(30.4%)	(42.4%)	(217)		
良好	6.2%	2.1%	2.1%	12.4%	32.1%	45.1%	193		
良好ではない	33.3%	8.3%	0.0%	20.8%	16.7%	20.8%	24	26.315 ** ※	
(母親)									
0～9歳	(9.4%)	(5.9%)	(2.4%)	(7.6%)	(27.1%)	(47.6%)	(170)		
良好	9.4%	5.9%	2.4%	7.6%	27.1%	47.6%	170		
良好ではない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0		
10～19歳	(16.2%)	(5.6%)	(2.1%)	(18.8%)	(38.0%)	(19.2%)	(234)		
良好	15.8%	5.7%	2.2%	18.4%	38.6%	19.3%	228		
良好ではない	33.3%	0.0%	0.0%	33.3%	16.7%	16.7%	6	3.033 ※	
20～29歳	(10.7%)	(3.6%)	(1.6%)	(30.0%)	(38.3%)	(15.8%)	(253)		
良好	9.9%	3.7%	1.6%	30.0%	38.3%	16.5%	243		
良好ではない	30.0%	0.0%	0.0%	30.0%	40.0%	0.0%	10	5.833 ※	

注1：†はp<.10、*はp<.05、**はp<.01をそれぞれ示している。

注2：※は期待度数が5未満のセルが20%以上、もしくは期待度数が1未満のセルがあったことを示している。

注3：網掛けしたセルは残差分析の結果5%水準で有意であることを示している。

5. 議論

妊娠先行型結婚であるか結婚したのちに妊娠したかという結婚をめぐる経験と第一子が生まれたタイミングの違いによって、親子関係は異なるのかを検証した。その結果、父親と母親との間の傾向の違いが示唆され、とりわけ親子関係をみると、第一子の出産年齢と妊娠先行型であるかどうかによって違いがあるのは母親よりもむしろ父親であるのではないということが明らかになった。

本論文の結果から、たしかに全体的な特徴として父親よりも母親の方が子どもとのネガティブな関わりかたをしている比率も大きいいため、たとえば子どもへの虐待を未然に防ぐためには母親に対する支援が有用であると思われる。しかしながら、母親全体にそうした傾向がみられるということは、それだけ子どもと過ごす時間が多いことの結果であると考えられるのではないだろうか。言い換えれば、父親はそもそも子どもと過ごす機会が少ないために、ネガティブな関わりかたをすることも少ないのではないかと考えられる。さらにいえば、本論文の分析では、母親の子どもとの関わりかたや関係性には第一子が生まれたタイミングや妊娠先行であることによる違いはみられなかった。つまり、特定の家族形成のあり方をしているということが親子関係における問題と関連しているというよりも、子育ての責任やプレッシャーの大きさという問題が母親全体の問題としていまだ解消されていないことが示唆される。母親に対しては、妊娠先行型であることや若年であることに当てはまる母親だけではなく、全体に対しての子育て支援が依然として求められているのではないだろうか。一方で父親は、とりわけ第一子との関係性について妊娠先行型であることによる差が確認された。この結果からは、現行のように妊娠先行型の母親に対する支援だけではなく、父親に対しても親役割の獲得を促す取り組みや子どもとの関係性を構築するための支援が求められているのではないかと示唆される。

ただし、本論文の問題点として、分析類型のサンプルサイズのばらつきが大きくなってしまったことが挙げられる。これは NFRJ18 調査が全国規模の家族調査であるがゆえに生じた課題であると考えられ、本論文が焦点を当てようとした妊娠先行型結婚を経験したケースや若年で子どもが生まれたケースが少なくなってしまった。本論文の類型を用いて議論をさらに深めていくとするならば、サンプリング方法などを工夫してサンプルサイズを確保していく必要があると考えられる。この課題と関連して、サンプルサイズが小さくなってしまふことから、経済的側面での統制を加えることが難しかった。本論文の結果も経済的な状況を統制すると異なる結果が示されるかもしれない。また NFRJ18 調査は回答者の年齢によって質問票が異なる調査設計であるため、たとえば子どもとの関係良好度を問う項目のように、同じ変数を一貫して用いることができない場合もあり、データの欠損もでてしまった。こうした課題を克服しつつ調査を実施し、議論をさらに深めていくことを今後の課題としたい。

[謝辞]

本論文の作成にあたって、NFRJ18 研究会の皆さまや分析中間報告会の参加者の皆さまから貴重で有益なコメントや示唆をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

[備考]

NFRJ18 の調査概要の詳細については、第一次報告書を参照されたい。

(<https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>)

[文献]

- 跡上富美, 2011, 「妊娠先行婚女性の家族形成過程の特徴」『東北大学医学部保健学科紀要』20(1): 45-54.
- 林知里・横山美江・根岸浄子・大塚千晴・池田優美・村井智郁子・山口理恵子, 2015, 「10代の母親の育児状況とニーズ」『大阪市立大学看護学雑誌』11: 21-28.
- 平田多歌子・西脇美春, 2014, 「『妊娠先行型結婚女性』と『非妊娠先行型結婚女性』の母性意識, 不安, 夫婦関係満足と役割の変化と比較」『母性衛生』55(2): 510-518.
- 伊藤路奈・山本泰弘・春名佑美・玉城英子・矢島正純・安藤索・岩下光利, 2020, 「当院における特定妊婦の選定基準と経過に関する検討」『女性心身医学』24(3): 237-241.
- 近藤由佳里・大庭智子・田中智子・古賀あゆみ・光吉久美子・大塚康代・野口ゆかり・新小田春美・平田伸子・加来恒壽, 2005, 「『できちゃった結婚』妊婦における母性不安と母性意識・愛着形成について——計画妊娠の初産婦と比較して」『母性衛生』45(4): 518-529.
- 黒川恵子・入江安子, 2017, 「特定妊婦に対する保健師の支援プロセス——妊娠から子育てへの継続したかかわり」『日本看護科学会誌』37: 114-122.
- 村越友紀・望月善子・渡辺博・稲葉憲之, 2011, 「10代出産女性の現状と課題——10代出産女性のアンケート調査からの検討」『Dokkyo journal of medical sciences』38(1): 87-94.
- 永田夏来, 2002, 「夫婦関係にみる『結婚』の意味づけ——妊娠先行型結婚と恋愛結婚の再生産」『年報社会学論集』2002(15): 214-225.
- , 2016, 「妊娠先行型結婚にみる生活状況と出生意欲」『兵庫教育大学研究紀要』49: 77-85.
- 大川聡子, 2010, 「10代の母親が社会化する過程において, 顕在化する支援ニーズ」『立命館産業社会論集』46(2): 67-88.
- ・安本理抄・根来佐由美・上野昌江・竹田諒太・伊計真季・西本夕紀・池田 和功, 2018, 「若年層母親の子育て実態と支援ニーズの特徴——24歳以下で第1子を出産した母親に焦点を当てて」『大阪府立大学看護学雑誌』24(1): 77-84.
- 盛山幸子・島田三恵子, 2008, 「妊娠先行結婚と妊婦の対児感情・母親役割獲得・夫婦関係との関連」『日本助産学会誌』22(2): 222-232.

Differences in parent-child relationships due to pregnancy-preceding marriage; Focusing on the difference in the timing of the birth of the first child

Kanae TAKAHASHI

Meiji University

Pregnancy-preceding marriage appears to be gaining acceptance as a pattern of family formation in Japan. However, most existing studies on pregnancy-preceding marriage have highlighted that issues with parent-child relationships occur when people get a pregnancy-preceding marriage at a young age. The difficulties faced by young mothers and their solutions have been discussed. Conversely, the following problems remain: the analysis target rarely includes the father; the observation for parent-child relationships is limited to pregnancy or postpartum; features of pregnancy-preceding marriages and of young age are not systematically distinguished. Considering these issues, this paper examines the differences in parenting and parent-child relationships due to differences in the experience of marriage and its timing. Before the analysis, the cases were categorized into a group of participants who married after premarital pregnancy and a group of participants who married without pregnancy. Then, they were further divided into groups in which the timing of birth of the first child was early, intermediate, and late. Results using NFRJ18 showed that many fathers have little negative and positive interactions with children, and there were differences in parent-child relationship tendencies depending on the type. However, regarding the overall characteristics of mothers, no difference was found by type, and most mothers had a close relationship and communicated with their children. The differences in the degree of goodness of the relationship with the first child according to the age of the child were examined. The results revealed that the difference due to the pregnancy-preceding marriage emerged from the father, rather than the mother.

Key words and phrases: pregnancy-preceding marriage, young mother, parent-child relationship